4　総合討論

＜鳩貝＞

では、総合討論を始めたいと思います。

まずはじめに、この会の準備を中心となって精力的に行ってまいりました中川先生から、補足や思っていることを少し、ご紹介いただければと思います。

＜中川＞

ご紹介いただきました、獣医師の中川でございます。

実は、みんなの面倒を見たり、準備をしていて、自分のしゃべることはほとんど考えていないことに気がつきまして困っております。だいたい、学校で動物を飼うか飼わないかということですが、家庭で飼えばいいんじゃないかという考えもあるんですけれども、抄録の最後から２ページ目にですね、家庭での飼育状況が書いてあります。はあちこちで調べさせていただいて、結局、このごろ多いのは、飼っていない子どもたちと４年生の調査ですけれども、だいたいが水槽で飼っている動物なんですね。これは、東京、横浜、川崎といろいろなところで調べましたが、だいたい同じ傾向です。森田先生が、動物を飼うときには親御さんにアンケートを採っているんですが、それを見ましたら、この間のアンケートでは、「家では飼えないから、学校で飼ってくれるとありがたい」という回答が多かったんですね。家で飼えないという理由が私にはちょっとわからないんですけれども、森田先生のクラスでも、学校で飼っていると、そのうち家庭でも飼いだす、ほ乳類を飼う親御さんが増えてくる、ということのようです。私たちは命の実感を与えるために子どもと動物を放したくないと考えていて、学校での飼育を獣医師のサポートで何とかしようと考えています。そうすれば、１０年２０年経ったときに、家庭でみんな飼いだして、今みたいな問題がなくなっていればいいなという希望で、教育は希望だといわれますので、そういう希望で活動を続けています。

獣医師のサポート体制としては、抄録の一番後ろに学校獣医師の概要というのが書いてありますが、今実際に自治体がかかわっているところは、このピンク色の抄録がありますが、これは小動物の獣医師会の人たちがつくっている小動物獣医師会が、毎年こういう冊子を出していますが、これの２３ページにだいたい報告がまとまっています。そのうちの３１ページからは、各自治体の契約内容が詳しく載っています。群馬県みたいに行政がたくさん用意するところもありますし、だいたいが、１校１万円以下で、獣医師がすべてのことをやっているというのが現状です。森田先生の文京区のお話は、システムができているとおっしゃいましたけど、それは、獣医師会が来たら見ましょうという申し合わせをしただけで、どこからも手当が出ていません。でも、理解があって、各個人の獣医師が全部引き受けてやっているということです。

私たちは親として学校を見てきましたので、やはり、やらざるを得ないというところでやっていますので、そういう理解が獣医師にも広がるようにやっていければいいなと考えています。

保谷二小、先ほどの山崎先生の学校で経験したことですけれども、１，２年生の子どもたちに動物ふれあい教室、つまり、動物の導入編ということで、学校の動物をふれあわせたときに、さわらせる前は、何も質問が出ませんでした。抱かせたあとに、複数の子どもたちから、「動物は何でできてるんですか？」っていう質問が出たんです。ビックリして「え？」って聞き返したら、「何で動くんですか？」って聞くんですね。すごくその子にとっては不思議なんですね。そこまで、動物を意識したことがなかったんです。子どもたちは動物が好きだかわいいだといいますが、すべて映像です。実際にさわったときには、ビックリして放り出しちゃうんです。それが、実感が足りないということだと思うんです。だから、命が大切だとか大切じゃないとかいう前に、命とはどういうものだ、動物とはどういうものだ、人間も動物だと、そういう観点から子どもたちに体験をさせてあげられたらな、と思っているわけです。

終わります。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。

今、中川先生の方から今まで活動してきた、獣医師さんと学校とのかかわりを通して、そのなかで、「実感として」というお話があったと思います。今まで発表された先生方は、そこが共通点であったように思います。

時間をできるだけ詰めてとお願いしたもので

すから、どうしても３０分の中で話ができなかった部分について、１，２分で各先生方に補足説明をいただきたいと思います。

森田先生どうでしょう？

＜森田＞

発表資料の一番最後に課題をいくつかあげたんですけれども、たぶん１番についてはこれから話題になるのでいいと思うんですが、実際に飼ってみるとお金の問題とか土日に持って帰るときの順番をどうするかということについて、われわれ担任としては頭の痛いところです。治療費については、獣医師さんたちが協力して体制をとってくだされば何とかなると思うんですが、実際には餌代とか飼育ケースの購入とかという問題が出てくるわけですね。やっぱりそれは学級で飼うんですからその辺は保護者に理解していただいて、学級費で買ったりもしています。それから、かわいい問ですから最初はみんなが飼いたい飼いたいと言うので、それを調整するのは、やっぱり担任がやらなければいけない。それを子どもたちに任せることは最終的にはいいと思うんですが、最初やっぱりこういうルールでこんなふうにやりましょう、というのは、先生がつくってあげないといけないわけです。全部子どもに任せっぱなしでも、やっぱり困るし、その辺の担任のかかわり方というのは、学級の実態もいろいろあって、いろいろやりながら修正をしていくというのが実態なんです。特に夏休みとか冬休み、それからお盆の時期、正月の前後というのは誰も引き取り手がいないんですよね。少ないんです。どうしても。中には、投句の地方へ帰省するんだけれども大丈夫か？と聞かれたこともありますが、大渋滞の中１０時間も車の中に置くというのは、いくらクーラーが利いているといっても厳しいよ。という話をします。そういう場合には、最悪は、私が引き取るということで、私の夏休みの日程も全部出して、その中で調整をしてもらったりしています。

こういう細々としたことは、目に見えないんですけれども、いいことばかり表には出していますが、いろいろなことを裏で担任が抱えざるを得ないことも事実です。そのことを、やはり嫌だとは思わないで、いい意味で、保護者との協力体制をとっていくということで、うまくクリアできればいいなと思っています。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。山崎先生、お願いします。

＜山崎＞

学校では本当に忙しくて、たくさんやらなければならないことがあります。そこで、動物の飼育をすると、勉強に支障が出ると思われる先生方も多いみたいです。でも、学習プログラムの中に、飼育が有意義であるという位置づけを行うことができたら、私たちはそうしたわけですけれども、そのときから気持ちが楽になったんです。飼育がいろいろな教科に波及できるということで、いろいろな教科とのタイアップを１年間の中で考えてきましたので、これが学習であるという意識の変化と計画性をもったことで、教師にとっては安心感につながったと言えます。

先ほどの発表で、動物の飼育が人権尊重と関係あると言いました。今、校内の研究で、人権尊重についてみんなで勉強しています。たとえば、高齢者ですとか、子どもの問題、障害者の問題、先日はハンセン病の患者さんの施設や資料館などの見学にも行ったりしたんですけれども、やはり、共生の立場に立つために、どんな教材で子どもたちにそんな理念を形作ろうかということを研究しています。正しい知識の不足から起こる差別意識、弱い者を支配しようとする潜在的な信条とか独占欲というのが、お年寄りに対しても、障害者に対しても、ドメスティックバイオレンスというもに対してあるということを、私たちが勉強して知るわけです。でも、こういう心というのが、動物を飼育していても、すごく芽生えるんだなと思いました。動物って本当に思うようにいかないし、弱い立場なんですけれども、最初は、お世話してやっているんだという意識が子どもたちにもあります。僕たちがこの子たちの命を握っている感覚ですね。それが、だんだん、動物たちにも個性があるし、好きなものもあるし、ちょっとした癖もあるし、最後には、１年間通すと、こうしてほしいんじゃないか、だからこうしてあげよう、という同等の立場に立つということに気がついたんです。それが、やはり人権尊重という点でも、原点だと思うんです。だから、障害者についての勉強もします。また、お年寄りの勉強もいっぱいしますけれど、飼育をしてみて、なかなかこれはいい

んじゃないかなと思いました。そういう手応えを、１年の中で感じて、今年は、違う先生方がやっているんですけれども、校内みんなでサポートするということが大事かなという感覚を得ました。

また、公立小学校の場合は異動というものがありますので、私も、別の学校に異動したときにも、そこの飼育舎がどうなっているかということもあると思うんですが、そこでも何かしらのかかわりができるかなと思います。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。続きまして、桑原先生お願いします。

＜桑原＞

子どもと動物のかかわり方や飼育指導の基準を、ここの場で、みなさんでこんな基準がいいよとか、こんな方法がいいよとか、指導案、指導方法、簡単に動物を選ぶ方法など、どこの視点に合わせて、子どもの教育に動物をかかわらせていくか、やはり、真剣に討論する場を設ける必要があるんじゃないかと考えます。やはり、動物に対する認識というのは、かなり幅があるんじゃないかと思います。その幅のある中で、教育ということで考えたら、こうあるべきだという、ある程度の基準を出しながら、子どもの指導にあたっていけたら、より、先生方もわれわれ獣医師も、たいへんな思いをせずに、子どもの教育に十分よい影響が果たせる飼育になるんじゃないかと考えます。

ということで、研究会のテーマとして、その辺を議論していったら研究会の活性化につながるんじゃないかと思いますし、いい方向が導き出せるのではないかと考えております。＜鳩貝＞

ありがとうございました。それでは唐木先生お願いします。

＜唐木＞

特に付け加えることはないんですが、あえてお話をするとすれば、一つは森田先生のお話にもありましたが、動物は自然のままがいいという誤解が非常に広く広がっているということには、かなり私もこれではいけないなという感じがいたしました。自然の動物と飼育されている動物は全然違うんだということを理解しなければいけません。飼育されている動物、あるいは家畜というのは、人間が作り出した動物であって、人間が世話をしないと生きていけない動物であるということです。そして、飼育するということには非常に大きな責任が伴うということです。だから、子どもがその責任を感じるということが教育になるということですが、一方、責任を伴うということは、必要性がなければ飼いたくないという、現代の家庭の問題にも変わってくるわけです。昔はわれわれは、食べるという目的でたくさんの動物を飼っていましたけれども、今はもう、スーパーマーケットに行けば何でも手に入る時代で、自分で動物を飼う必要もないということになります。

そうすると家庭での動物の飼育は、これからはどうなるのかということですけれども、一つの例をあげると、お年寄りの家庭が増えて、お年寄りが癒しのために動物を飼うということが増えてきたということがあります。また、そういった生活環境の変化で動物を飼うことが少なくなったけれども、それがまた、違った形で動物を飼育することになるということになってきたのかなと思います。ですから、子どものために動物を飼育することの必要性というものを社会が認識すれば、やはり、子どものために動物を飼育しようという家庭も増えてくるんだろうと思います。

そのためには私たちが、こういう運動や活動をもう少し続けていって、その必要性をアピールしていくということが大事だろうと考えます。

それから、もう一つは、動物を使う教育に限らず、教育をするときに私たちが是非考えなくてはいけないことは、脳の問題を先ほどお話いたしましたが、人間の進化の問題です。進化の中で人間がどういう性質を獲得してきたのか、という問題も考えなくてはいけないと思います。暴力というのは、おかしな人間がすることではない。われわれ全員が、暴力に快感を覚えるという異本的な性格をもっているということ、それをきちんと、発達の段階で抑えるというメカニズムがあるから、われわれは今それを抑えられているわけです。それを抑えられないと、それが表面に出てきてしまう。そういった危険性はみんながもっているということを認識して教育をしなくてはいけません。

同じように差別をするということ、これは、動物がもっている当たり前の性格なんです。ですから、悪い子どもが差別をする、悪い大人が差別をするのではない。そういう教育を受けなかったら、われわれはみんな差別をするんです。それは、詳しく話をすると長くなりますが、たとえば、動物が繁殖の相手を選ぶときに、最低限選ぶ条件は左右対称なんですね。なぜかというと、繁殖の相手の遺伝子がかなり正しくないと、自分の子どもがおかしくなるかもしれない。ただ遺伝子は目に見えない。しかし、遺伝子が典型的な目に見える形になるのが、顔、体、すべてが左右対称であるということなんです。これは、遺伝子がかなりしっかりしていないと、左右対称にはならないんです。ですから、すべての動物が、内臓は左右非対称ですけれども、少なくとも、外見だけは左右対称にできているということは、動物が、繁殖の相手と

して、左右対称の相手を選んでいるという、その結果なんですね。人間にももちろんその性格が残っています。ですから、傷害がある人、左右が非対称の人に対し、まず子どもは気持ち悪いと思う。大人も子どももそう思います。そこから差別が始まるわけです。ただ、それがいけないことなんだということをきちんと教えないと、教えない限りは、本能的にはわれわれは気持ちが悪いと差別をしてしまう。そういった、人間の進化あるいは脳の働きをきちんと知った上で、教育を進めるということが非常に大事であるというように考えます。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。

それぞれのみなさんから補足の説明をいただきました。残った時間がだいぶ少なくなってまいりましたが、お聞きの先生方からご質問でも結構ですし、ご意見でも結構です。これに限ってと絞るにしてもちょっとあまりにもテーマが大きいものですから、まず、いろいろなご意見、お考えの方もいらっしゃると思いますが、動物を飼育するということにおいての、今までのお話をふまえた上で、ご発言をいただければと思います。なお、あまり一人で長くお話しされると時間もなくなってしまいますので、できましたら３分程度で、ご自分の考え等を含めてお話しいただければと思います。ご意見ご質問がある方は挙手をお願いいただけますでしょうか。そして、所属お名前をいただいた上でご発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

＜武＞

群馬県教育委員会の武と申します。

自分の考えというもの、自分の実践というものを、今配られた紙に連ねてみて、自分の気持ちを整理したつもりでいます。

そこで、提案といいますか、提言のようなものをさせていただければと思います。常々思っていることは、桑原先生のご発表にもありましたとおり、実際に子どもたちを指導している先生方が、経験がない。知らない。だけれども、学校にいると動物がいる。だから、仕方なく飼うという負担感や義務感、リスク感というか、そういうものが先生方にあるがために、正しい飼育ができない。正しいふれあいが子どもたちにできないという事実があるかと思います。

そこで、一番必要なことは、先生方が、子どもたちと動物がふれあうということについて、必要性を認めて、そして、義務感やリスク感を少しでも少なくして、そして、子どもたちに適切な指導ができるということが必要かと思います。

そのためには、やはり先生方の研修が必要だと思うわけです。その研修の場というのが、今曖昧な状態にある。だから、この会でこれからの研究の中で、その研修の場というものを、虚位初苦行性と獣医師会とがタッグを組んで研修の機会をしっかり設けるということが必要だと思います。その際にどんな研修が必要かというと、やはり、桑原先生がおっしゃっているように、飼育基準のようなものをしっかりと設けて、それをもとにした研修が、全国の中で行われていくということが今、いちばん求められているというのではないかというふうに考えております。

ですから、この研究会が、国や地方自治体の教育行政を動かしていけるようになっていければいいという期待感をもって、今発言をさせていただきました。

＜鳩貝＞

ありがとうございました。具体的なこの研究会でやるべきことを含めて提案いただきました。

そのほかいかがでしょうか。

＜横山＞

防医連の横山と申します。

ちょっとお聞きしたいんですが、学校飼育動物のおもしろさというものは集団で飼うことだと思うんです。それで、われわれの生活上、みんなで一つの命を、たとえば、ペット、イヌとか飼っていたら１対１の関係しかもてない場合に、今まで学校の先生方もそうだと思うんですが、集団で一つの命に向き合う距離感ていうものをどうとったらいいかわからないんじゃないかと思うんです。たとえばイヌを飼っている子が、学校で１０人でハムスターを飼ったら、同距離感をとったらいいかわかりにくいと思うんです。どういうふうに、命との距離感をもつように教えるというか、気構えを学校の先生方がもつのかということが、全然わからないので教えていただきたいと思います。

＜森田＞

今のご質問で、私はそういう距離感というのをあまり感じないんですけれども、具体的に、自分の家でたとえばイヌを飼っていれば、自分である程度占有できるっていうのはありますよね。ところが、１０人で飼っていれば、自分だけ占有すれば周りからはずるいと非難されます。そういう意味では、ある程度セーブしてつきあいますね。たとえば、飼育当番ならばある程度きちんと世話をする。世話をするということはマイナスのイメージかもしれないけれど、プラスのイメージとすれば、動物にさわれる。自分の飼育当番じゃなければ、当番がさわっているときに横取りするっていうことはしないということが、たとえ１年生でも